バハオーフェンの神話解釈（一）
――『タナクィルの伝承』を手掛かりにして――

吉原達也

はじめに
一　「王権を付与する女性」論
　1．ルクモ＝タルクィニウス・プリスクス即位伝説
　2．セルウィウス・トゥリウスの出自及び即位伝説（以上本号）
二　王権神話論の構造
三　王権神話論の検討
小結

はじめに

先に、バハオーフェン『タナクィルの伝承』（一八七〇年）[1]をめぐって、その神話・伝説・歴史論に関する若干の考察の機会を得た。[2]バハオーフェンにとって、伝説上の女性タナクィルは、世界史の大転換点の象徴ともいうべき存在であり、歴史上の特定の時代の一回的な状況で決定的な役割を果たしたというよりも、重大事件、つまり、ローマ的精神によるオリエント起源の物質的生活観念の克服という事件の体現者である。バハオーフェンは、まず、タナクィル伝説の一場面に注目する。その伝説の場面は歴史叙述においてきわめて重要部分である。タルクィニウス・プリ

スクスは、一人の女性の助力でローマの王位に即くことができた。表現形式は異なるが、セルウィウス・トゥリウスの王位継承の場合も同様である。タルクィニウス・スペルブスもタナクィルの似姿たるトゥリアによって最高権力を獲得する。ローマ王政期における三代にわたる王位継承をめぐって、王権の獲得に女性が大きな役割を果たしている。これらの事象は、バハオーフェンによれば、「女性に由来する最高権力」という根本観念から説明されるべきものである。こうした女性からの王権の継承は、「偉大で完結した文化時代を際立たせる特徴の一つである」（Bd. VI, S. 11）。

バハオーフェンによれば、こうした観念はローマの政治＝国家原理とはまったく対照的であり、オリエント的な観念がローマにおいて認められるようになった帝国末期においてようやく認められるにすぎず、同様にギリシア世界にも類似の観念は見られない。これに対して、権力が女性に由来するという観念がアジアのさまざまな神話に見られることは、かつてローマとオリエントの観念との接触があったことを示している、と考える。両者の結節点として、オリエントとの結びつきがあるとされる、エトルリア人[3]、テュレニア＝リディア人、サビニ人という三つのイタリア民族にバハオーフェンは注目する（ibid.）。アジアの王統伝説の解釈を通じて、タナクィル像の肉付けが施される。アジア＝アッシリア世界に共通する観念として、「王権を付与する女性」は、ヘタイラであり、ヘラクレスと関係があり、対をなす男性を支配しているという三つの特徴を有するとされる（Bd. VI, S. 12）。しかしローマの伝説では、タナクィルは、「王権を付与する女性」という観念を維持しているが、他の特徴は認められない[4]、という。バハオーフェンにとって、ローマのタナクィルは、物質的―ヘタイラ＝娼婦的観念に対する、精神的―既婚婦人＝マトロナ的観念の勝利を示す。タナクィルは、精神による本能的自然的生の克服、父権制による母権制の克服を象徴する。しかし、タナクィルのローマにおける変容は、さらに別の点で、バハオーフェンの注目するところとなる。「タナクィルはアジアの王朝の娼婦たる王妃からローマの婦徳と尊敬のモデルとなっただけではない。それのみらず内心の信仰の産物か

ら歴史上の人物ともなった。」…「ローマはすべてをその国家生活と不即不離の関係に置いた」（Bd. VI, S. 41）。ローマは「宗教観念を国家の発展史のなかに織り込み、自然思想を政治［国家］思想によって排除し、政治［国家］思想がすべてをその要請によって変化させた。」…「そのなかでも注目すべきは、タナクィルの宗教的意味が、一方で、理念の上でも起源の上でも親近性のある母神プラエネステのフォルトゥナに移され、エトルリアの王妃の歴史化に道が開かれたという現象である。」（Bd. VI, S. 44）タナクィルは、元々バハオーフェンにとってはアジアの自然の大母神に匹敵する母神であったが、ローマで、その神性を捨てて初めて、政治的に行動する歴史的人物となった。タナクィルは、もはや女神としてではなく、タルクィニウス・プリスクスの妻として、後世のローマ女性の婦徳の鑑となり崇拝の対象となる。不死なる女神から、死すべき人間の妻となる。宗教的神話から政治的―歴史的神話となる。ローマはあらゆる宗教思想を排除したわけではないが、ローマはそれを制限し、従属的な地位に置いた。タナクィルはその宗教的性格をフォルトゥナに移される。これによりその本来の形姿はもはや宗教的崇拝を受けなくなる。しかしまさにこのような神性の転換と捨象、人格化のなかに、バハオーフェンは、まったく非歴史的で宇宙論的生活観――オリエントだけでなく、ギリシアすらもそうである――に対して、世界を歴史として考察する思考法の登場を見出している（cf. Bd. VI, S. 46）。このことは、バハオーフェンにとって、タナクィル研究の第二の重要な成果である。歴史的思考法による自然神話的思考法の克服と倫理的生活観による自然拘束的生活観の克服は密接に連関する。両者は同じ一つの過程の両面である。いずれの場合も、同じように、非物質的［＝精神的］父性原理が主要な原理であるように見える。[5] ローマの神話伝承はそうした視点から記されている。タナクィル像のローマ的変遷というモチーフのなかで、ローマの伝承とオリエントのさまざまな神話・伝承との対応関係がいかにバハオーフェンによって把握されているか、以下では、まず、ルクモ＝タルクィニウス・プリスクスとセルウィウス・トゥリウスのローマ王即位をめぐるロ

ーマの伝説、次いで、アジア＝オリエントの神話・伝説、両者の対応関係について、順を追って検討していくことにしたい。[6]

一　「王権を付与する女性」論

1　ルクモ＝タルクィニウス・プリスクス即位伝説

バハオーフェンは『タナクィルの伝承』の冒頭で、まず、リウィウス『ローマ建国史』[7]におけるタナクィル関連の記事から、ルクモ＝タルクィニウス・プリスクスのローマ王即位に至る経緯を、次のように要約している。

「リウィウスの王統史によれば、タナクィルは、まずデマラトスの子ルクモ――ローマ王としてはタルクィニウス・プリスクスと名乗る――との関連で登場する。彼女は、故郷タルクィニイの最上流の家柄の出で、コリントスからの亡命者の唯一の相続人［ルクモ］と結婚する。しかし同じ身分の者たちから外来者の妻となった自分に対する屈辱に耐えられず、タナクィルは夫にローマへの移住を勧める。そこでは、サビニ人のタティウスが王になり、クレス出身のヌマが王に招かれ、サビニ人を母とするアンクスが王がとなっている、と。すべてにおいて行動の切っ掛けを与えるのはタナクィルである。彼女は移住の決断を夫に迫り、新しい故郷の選択を決める。ヤニクルムの丘で到来者たちを驚かせる不思議な鳥の出現したさいに、ことの次第を悟り、助言と勧告によって主導権を発揮するのもタナクィルである。予兆はたしかにルキウスに送られたのであり、帽子はルキウスの頭を離れてふたたびもとに戻される。しかし予兆の意味を悟のは一人タナクィルだけである。タナクィルは神の使者の意味を明らかにし、夫を抱きしめて、その輝ける素晴らしい運命を約束する。この場面にタナクィルの登場が意味深ければそれだけ、彼女が突然姿を消し

てしまうこともいっそう注目される。アンクス王の都に初めて迎えられるときも、ローマ王即位のときにも、公的生活の何らかの事蹟にも、もはやタナクィルの名前は登場することはない。」（Bd. VI. S. 55）

バハオーフェンは、リウィウスの記事から二点に注目している。

1　ローマ移住のきっかけを与えたのはタナクィルである。タナクィルは、亡命して来た外来者の子として蔑まれた人物［ルクモ］との結婚によって周囲から蔑まれていると感じる。そこでタルクィニイを去ること、移住先としてはローマが理想であることを語る。バハオーフェンによれば、タナクィルはこの決断を夫に「迫り」（auferlegen）、新しい故郷の選択を「決める」（bestimmen）。

2　ローマに到着し、ヤニクルム丘で、タナクィルだけが鳥の予兆の意味を悟る。鳥の予兆の意味を明らかにするのは、予兆が送られたルクモではなく、タナクィルであった。

いずれの場合も、タナクィルがルクモに対して「優越的な立場」に立っており、原動力となって、タルクィニウスが最終的にローマで王位に就くのはタナクィルの力に負っている。

バハオーフェンはこのリウィウスの箇所の解釈を出発点として、タナクィル伝説論を展開していく。バハオーフェンのこうした解釈について、批判がないわけではない。例えば、オットー・ヴァルターの神話学の系譜に属する、オイイング（Euing）は、『タナクィル伝説論』（一九三三年）[8]において、バハオーフェンのタナクィル論の問題点を指摘している。[9]これによると、バハオーフェンは、さきの二点は、男性［夫］と女性［妻］の対立によって理解しようとしている。タナクィルは男性［夫］のために、女性［妻］である限りにおいて、まさに女性［妻］であるがゆえに鳥の予兆の意味を解いてみせたとされる。バハオーフェンは、男性［夫］に決断を「迫り」、移住先の選択を「決め

る」タナクィルに、男性を支配する女性という類型を認める。つまり、バハオーフェンにとって、たしかにこれらの事象は「母権制」的な状況を示唆することになる。

オイイングによると、リウィウスの当該箇所は次のように理解される。

ルクモ＝タルクィニウス・プリスクスに注目すると、① その母はタルクィニイの人であり、父親のデマラトスはコリントスからの亡命者である。タルクィニイの町では、プリスクスは、「外来者の血筋の出」（peregrina stirpe oriundus : Liv. 1, 34, 1）、「亡命の外来者の子」（exule advena ortus : Liv. 1, 34, 5）として蔑まれた。母権制の観点からすれば、母方の血筋が子どもの身分に決定的であるとすると、プリスクスに対する蔑みは理解できない。母権制のもとで、父親が外来者であることはいかなることを意味するのか。母親がエトルリアの血筋であれば、プリスクスはむしろ尊重されて然るべきではないか。② タルクィニウス・プリスクスの父親は死ぬ直前に息子を全財産の相続人とした。母親については言及はない。母権制であれば、財産は母親の手で管理されるはずであり、遺言するのは母親の方である。③ タルクィニウス・プリスクスは、典型的な男性的特徴を備えている。彼は「富裕のゆえに力を得た不屈の人物ルクモがローマに移住してきた。とくに大きな名誉を熱望して熄まなかったが、これを得る機会はタルクィニイ市にはなかった」（Liv. 1, 34, 1）と記されている。とすれば、タナクィルがローマ移住を決断する際に、権力欲や名誉欲に訴えかけたのも理由のないことではない。こうした支配欲や権力欲は彼をして母の故郷に安楽に生活するという気持ちを生じさせない。それゆえタナクィルはタルクィニウスを「たかだか母方の祖国でしかなった」と言うだけで、容易に説得することができた。その後タルクィニウスはローマでアンクス王の死後民会を召集して王に選ばれるが、その際にはタナクィルについては何ら言及されることはなく、すべてタルクィニウス自身の仕事である。タルクィニウスは、決断にあたって女性によって支配されるだけの男性ではない。[10]

その一方で、① タナクィルは、リウィウスでは「最上流の出で、自分の生まれついた身分より卑しいところへ嫁いだまま、それなりになっていなかった」とされる。母権制のもとであれば、タナクィルの出自や身分は外来者との結婚によって影響されない。② タナクィルはルクモの家に嫁いだ（innupsisset<innubere Liv, 1, 34, 4）。父権制のもとでのみ、女性が結婚によって実家を離れて、「嫁ぐ」ことなる。③ タナクィルは「母国に対する生来の愛着を忘れ、一途に夫の栄達を見んものと、タルクィニイ市から移住することを相談した」（Liv. 1, 34, 5）。タナクィルが、故郷を捨て、親類縁者との関係を絶ち、「一途に夫の栄達を夢みる」姿は、国家生活を支配し王権を付与する女性像というよりは、むしろ得られるものであれば故郷を捨ててまでも何ごとにも夫の幸運と名誉とを大事と思う夫に従属する女性像を示している。「これらのことからみると、リウィウスの叙述は母権制的というよりはむしろ厳格に父権制的な状況を示している」[11]、と、オイイングは指摘する。

オイイングの指摘は、バハオーフェンがリウィウスをどのように読んでいるかを明らかにしてくれる。オイイングによれば、バハオーフェンのタナクィル像は、① タルクィニイ市からローマへの移住の決断はタナクィルに主導権がある、② タナクィルだけが鳥の予兆の意味を悟ることができたされるという二点から組み立てられている。バハオーフェンがいうように、タナクィルがルクモに決断を「迫った」というのは、「読み込み」にすぎる。むしろローマでは、ヌマやアンクスといった歴代の王がローマ以外から迎えられているといったさまざまな理由をつけて、説得しているのであり、それだけでは、タナクィルの側に一方的にその決断への主導権があったといえない[12]。鳥の予兆をめぐっても、タナクィルだけが鳥の予兆の意味を悟ることができたということから、「女性だけが男性と比較して奇蹟を解釈することができる」（Bd. VI. S. 55）と結論されるが、こうした理解も「重大な解釈の誤り」に基づくものである、とされる[13]。リウィウスでは、「この鳥の予兆をタナクィルは大喜びで受けとったといわれる。彼女は、エトル

リア人一般の例に洩れず（ut vulgo Etrusci）、天来の変異によく通じた女性だった」（Liv. 1, 34, 9）とある。このように本文では「エトルリア人一般の例に洩れず」という表現からは、エトルリアにおける占術が女性の専属管轄であるとの右の結論を導くは誤りだというのである（「期待されるような女性形の Etruscaeとは記されていない」）。

もちろんオイイングのような理解が可能であるとしても、どちらかといえば、この点ではオイイングの方に「読み込み」があるようである。バハオーフェンは本文中で「この女性」＝タナクィルと「男性」＝ルクモの対照を言い換えているだけで、必ずしも女性一般に敷衍しているわけではない。むしろバハオーフェンは、リウィウスを正確に読んでいるのであり、無理に結論を導こうとしているのでは決してない。たしかにオイイングが指摘するように、リウィウス自体に、「王権を付与するタナクィル」について、明確に言及されているわけではない。タナクィルは鳥の予兆を解釈し、ルクモに神の恩寵のあることを示唆するだけである。リウィウスには「母権制的な状況」の痕跡はいささかも見出されないとも言われる。タナクィルは「女性指向的な文化の象徴」ではなく、予兆に精通したタルクィニウス・プリスクスの妻で、その脇で助言を通じて夫に従属する存在として描かれている。[14] そのように読むのが「素直だ」とオイイングは言うのであるが、バハオーフェンがそこから展開したタナクィルをめぐる独自の神話論の特質をむしろ捉えることができないように思われる。[15] そこで、次に、セルウィウス・トゥリウスによる王権獲得にかかわる伝説について見てみよう。

2　セルウィウス・トゥリウスの出自及び即位伝説

セルウィウス・トゥリウスのローマ王即位にまつわるリウィウスの記事について、バハオーフェンは、以下のように記している。

「リウィウスの伝承がかのエトルリア女性［タナクィル］をふたたび想起するとき、かの女性と関係するのも新しい王である。セルウィウス・トゥリウスに対しても、タナクィルは、先行者［ルクモ］に対するのと同様の立場に立っている。セルウィウス・トゥリウスも、自らのローマ王即位を、先王によりよき運命への道を開いたのと同じ女性の洞察、助言、勧告に負っている。二つの瞬間に、タナクィルは新しい寵児の運命に決定的に介入する。タナクィルは、幼児トゥリウスの頭上で火が燃え盛ろうとしたとき水で消そうと突然入ってきた侍女を制止し、子供の眠りを守った。彼女だけがすべての者たちの中でただ一人聖なる徴を認識し、ふたたび呼び出され、王である夫にその意味と、みすぼらしいなりの幼児の崇高な定めによりいつの日かエトルリア王家のローマにおける王座を救うというその使命を明らかにする。[16] タナクィルが二度目に登場するのは、この幼児期の啓示が実現される場面である。年老いた夫を暗殺しようとしたアンクス王の息子たちから支配権を奪い、娘婿のセルウィウスに渡すのもタナクィルである。不意の襲撃にも彼女は集中力をとぎらせることはない。ただちに王宮の扉を閉じさせ、その場に居合わせた者たちを遠ざけ、まだ王に回復の見込みがあるかのように、傷の治療のために奔走し、その後彼女は急いでセルウィウスを呼びよせ、かつて彼の頭を包んだ聖なる炎ことを思い起こさせ、王宮の上の階の新道（ノア・ウィア）に面した窓から民衆を鎮めるべく、驚くべき言葉で、夫の唯一の代理人としてセルウィウスを推挙し、あらゆる手段を講じて、タルクィニウス家の養嗣子にアンクスの息子たちに対する勝利とローマの王位をもたらす。[17] それによってタナクィルの役割は終わる。タナクィルは先代タルクィニウス王の物語と同様に、セルウィウスの物語から完全にその姿を消す。ルキウスとアルンスという彼女の二人の息子と、セルウィウスの二人の娘たちとの結婚にも寵児の事蹟にも何ら加わることもなく、この有名な女性のその後の運命と死については、我々の知るところではない。」（Bd. VI, S. 55-56）

バハオーフェンは、リウィウスの記事に基づいて、タナクィルとセルウィウス・トゥリウスとの関わりについて、二点を強調する。① 幼いセルウィウス・トゥリウスが王宮で眠っているときに現れた炎の啓示によって、その将来を予言する。② プリスクス王の暗殺事件に際し、タナクィルは、プリスクス王存命を装いつつ、娘婿のセルウィウス・トゥリウスの即位のために奔走し、王宮の上階の窓から民衆に向かって新王即位の正統性を自ら語りかける。この二つの瞬間だけにタナクィルは登場し、それ以後一切言及されることはない。タナクィルについて、プリスクスにまつわる鳥の予兆と王権の約束以後の突然の沈黙と同じく、セルウィウス・トゥリウスの即位に大きな役割を果たしながら、「以後の運命と死について同様の沈黙」（Bd. VI, S. 57）がある。このように、物語の中で、何ら語られない「沈黙」がくりかえし強調される。

リウィウスとともに、タナクィルとセルウィウス・トゥリウスとの関係について詳細に伝えるのは、ディオニュシオス・ハリカルナソスの記事である。[18] これは、リウィウスと重なり合うところも多いが、その異同について、二点だけ触れておく。リウィウスは、ファビウス・ピクトルその他の年代記作家により、タナクィルを、アルンスと後のローマ王タルクィニウス・スペルブスの母とするが、[19] ディオニュシオスは、ルキウス・ピソ・フルギにより一親等引き下げて、二人を孫としている。[20] 現存しない物語作家に依って、竈に現れた陽根によるセルウィウス・トゥリウスの出生譚とタナクィルの関わりを伝えているが、[21] これは、リウィウスではまったく言及されていない[22]（cf. Bd. VI, S. 57）。

リウィウスとディオニュシオス以外で、バハオーフェンが言及している資料について簡単に一覧しておく。まず、キケロ『国家について』（2・34―38）では、タナクィルについての言及はない。[23] 碑文資料であるクラウディウスの『ガリア市民権に関する演説』（紀元四八年）でも、タルクィニウス・プリスクスとセルウィウス・トゥリウスの出自と即位について記されているが、タナクィルへの言及はない。[24] プルタルコスは、「ローマ問題」、「女列伝」「ローマ人

の運命」では、タナクィルとセルウィウスの関係として、幼少期の火の兆しと即位の予言のほかに、タナクィルが死に臨んで、セルウィウスに王位に留まり、ローマ古来の体制を維持するよう誓いを立てさせたことへの言及がある[25]（cf. Bd. VI. S. 57-58）

バハオーフェンは、時代的に新しいこともある文献資料に加えて、エトルリアの「フランソワの墓[26]」の名前でも知られるヴルチの地下墓室の図像画について言及する（cf. Bd. VI, S. 58f.）。「フランソワの墓」は、一八五七年四月にトスカーナ人アレッサンドロ・フランソワにより発見され発掘されたが、その際発掘事業を経済的に支えたフランス人の東洋学者・考古学者のアドルフ・ノエル・デ・ヴェルジェー[27]はその学術的成果の公表権を独占したことでも知られる。この墓絵にバハオーフェンが注目するのは、そこに描かれた人物像が、先に挙げたクラウディウスの演説にも登場するマスタルナ（Mastarna）とその戦友カエレス・ウィベンナ（Caeles Vibenna あるいはウィウェンナ Vivenna）と一致するからである。それぞれ名前を記された二人一組の人物の動きが描かれており、そのうちのひと組が、裸の caile vipinas が紐で縛られた両手を前に差し出し、裸の macstarna がその紐を剣で断ち切ろうとしている。このマスタルナまたはマクスタルナは、クラウディウスの演説にあるように、トゥリウスと同定される人物である。それはタナクィル伝説にとってもきわめて重要な意味を有する。マスタルナが盟友ウィベンナを、敵の手から救出するという輝かしい企図は、この場合も「ニケポロス」つまり「勝利を愛する」タナクィルの恩寵であり、「この絵の血なまぐさい状況の中でのタナクィルの登場はそれ以外の解釈を許さない」（Bd. VI, S. 58）、また、セルウィウスもタナクィルもともにエトルリア出自であることは疑いをいれない、とされる（ibid.）。この絵の描かれた墓はエトルリア芸術の作品であり、画家が個々の人物を表すのに用いる文字もエトルリア文字である。成立年代もローマ建国四七三年を下らないこと、イリアスのシーンと並んで墓装飾として歴史的素材の使用はかなりの時間的な経過を前提とすると、タナク

ィル伝説の最初の形成は、セルウィウス時代を遠く離れない時代に遡るとされる[28]（Bd. VI, S. 59）。

さてこうした集められた資料に認められるタナクィル像の最も重要な特徴は、二人の男性をローマの王位に就けたことである。タナクィルがタルクィニウス・プリスクスとセルウィウス・トゥリウスの二人に対する好意の示し方は多様であるが、そうした表面的な多様性の背後に、単純な根本原理がある。「二人の王冠は女性の賜物」（Beide Kronen sind des Weibes Gabe）（Bd. VI. S. 59）[29]。タルクィニウスは異邦の人間にもかかわらずローマの王となる。セルウィウス・トゥリウスは、奴隷身分の母から生まれ、自らもタルクィニウス家の奴隷としての境遇から、ローマの王となる。不遇な境遇から頂点を極める逆転、変化をもたらすのがタナクィルの力である。タルクィニウス・プリスクスは、アンクス王の子等に暗殺され、その瞬間にタナクィルの手でセルウィウス・トゥリウスは王位に即く。セルウィウス・トゥリウスは、タナクィルの似姿トゥリアに操られたタルクィニウスに殺され、これが王位に即く。タナクィルは、リウィウスが「王権の賦与に、また奪取に（dando adimedoque regno）何ら影響力をふるえないとしたら」[30]とトゥリアに語らせる二重性を体現している。敵対する二つの王家の唯一の結節点がタナクィルであり、歴史の中のタルクィニウス家とセルウィウスとはまさにそのような関係に立つ。このように、バハオーフェンのタナクィル神話の解釈は、歴史解釈と結びつけられる。リウィウス、ディオニュシオスらのローマ史家によって伝えられる初期ローマの歴史の背後に、エトルリア人による支配の事実が覆い隠されているとも見える。ルクモ＝タルクィニウス・プリクスがコリント人を父とするといった伝承は、ローマ人の先祖をアエネアスとする紀元前後の歴史家の手法と同様でもある[31]。ルクモ自体、エトルリア語で「王」を意味するとされる[32]。あるいは出生地を示すタルクィニウスの姓などは、初期ローマのエトルリア人による支配がローマ史家の記述の中にタルクィニウス王朝時代にローマに流入したエトルリア文明のあとを想起させる[33]。バハオーフェンは、そうした状況の中で、ローマ史家の記述を読み取る手掛かりを、

ローマにおけるタナクィル像の変遷観点から示して見せた。以上『タナクィルの伝承』で提示される「王権を賦与する女性」のモチーフについて検討してきたが、次に、ヘタイラ＝娼婦的な性格、ヘラクレスとの関係を含めた、バハオーフェンの全体的な構想についての分析に移ることにしたい。（未完）

（1） J. J. Bachofen, Die Sage von Tanaquil, Eine Untersuchung über den Orientalismus in Rom und Italien, in : J. J. Bachofens Gesammelte Werk, Bd. VI, Basel, 1951（以下、引用は本文中に全集の巻数と頁 Bd. VI. S. 1 などとして表記する）。バハオーフェンの他の著作からの引用も同じ。バハオーフェンについては、吉原・平田・春山訳『母権制』上・下巻、白水社・一九九二―九三年、吉原訳『母権制序説』筑摩書房・二〇〇二年、平田・吉原訳『古代墳墓象徴試論』作品社・二〇〇四年所掲の上山安敏民による解説を参照されたい。

（2） 吉原達也「バハオーフェンにおける神話・伝説・歴史――『タナクィルの伝承』をめぐって――」広島法学第三一巻四号（二〇〇八年）一六七頁以下。

（3） エトルリアに関する文献は多い。平田隆一『エトルリア国制の研究』南窓社・一九八二年、「アテネ僭主政とローマ後期王政（その2）――タルクィニウス・プリスクスの王政の構造を中心として――」『ヨーロッパ研究』（東北大学大学院国際文化研究科ヨーロッパ文化論講座）創刊号（一九九六）、四一―六八頁、同「アテネ僭主政とローマ後期王政（その3）――セルウィウス・トゥリウス王の出自・即位・王権の性格――」『国際文化研究科論集』（東北大学大学院国際文化研究科）第四号（一九九六）、一頁―一六頁、同アテネ僭主政とローマ後期王政（その4）――セルウィウス・トゥリウスの王政の構造」『国際文化研究』（東北大学国際文化学会）三（一九九六）、七一―八五頁（以上Ⅱ～Ⅳとして引用）、同「ローマ共和政国家とエトルスキ宗教―研究ノートから―」東北大学教養部紀要第四一号（一九八四）、二一四―二三四頁など。H. H. Scullard, The Etruscan Cities and Rome, Ithaca, New York, 1967/1979.

（4） 以上の記述につき、吉原・前掲・一七一頁以下を参照。

（5） Andreas Cesana, Johann Jakob Bachofens Geschichtsdeutung, Eine Untersuchung ihrer geschichtsphilosophischen Voraussetzungen, 1983, Basel, S. 86ff.（モムゼン『ローマ史』と『タナクィルの伝承』の方法的差違について。）

（6） Marie Theres Fögen, Römische Rechtsgeschichten, Über Ursprung und Evolution eines sozialen Systems, Göttingen 2003. cf. Roy Garré, Divagazioni bachofeniane sulle “Römische Rechtsgeschichten” di Marie Theres Fögen, in: http:// www.forhistiur.de / zitat / 0501garré.htm. 同書

は「Lucretia-Brutus―ローマ共和政の起源」「Verginia-Appius Claudius Decemvir―法の起源」「Gnaevus Flavius-Appius Claudius Caecus-法の閉鎖と開示」「Comcanius, Cato & Co.―法の展開」「Labeo-Augustus―法の自律」といった章立てになっており、ローマ法の「物語」（Geschichten）という観点から、「一つの社会システムの起源と発展」を論じている。ルーマンのシステム論の影響を受けた著作とされる。バハオーフェンの神話論に直接言及するところはないが、ガッレが指摘するように、バハオーフェンのタナクィル論理解に有益な示唆が多い。これらの問題について、あらためて検討することとしたい。なお、Stolleis による Fögen へのネクロロジー（http:// 141.2.146.54 / pdf / marie.theres.foegen.pdf）及び年譜（http:// 141.2.146.54 / mitarbeiter / mitarbeiterhome / foegen.html）も参照されたい。

（7）　Livius, 1, 34, 1-12「〔1〕アンクスの治世に、富裕のゆえに力を得た不屈な人物ルクモがローマに移住して来た。とくに、大きな名誉を熱望してやまなかったが、これを得る機会はタルクィニイ市にはなかった――というのは、そこでも彼は外来者の血筋の出であったからである。〔2〕彼はコリントゥス人デマラトゥスの息子であった。デマラトゥスは内証のために故国を去り、たまたまタルクィニイ市に居を定めたので、そこで妻を娶り、息子二人を儲けた。この二人の名はルクモとアルルンスであった。ルクモは父親より生命長らえ、全財産の相続者となった。アルルンスは父親に先んじ、身重の妻を残して死ぬ。〔3〕そして、その父親も、息子に先立たれた後、長くは生きない。彼は、嫁が懐妊しているのを知らず、遺言に際して孫のことには思い及ぼずに世を去ったので、祖父の死後に生まれ、遺産の分け前に与らなかった男の子には貧困ゆえにエゲリウス〔貧乏人〕という名がつけられた。〔4〕これに反してルクモは、全財産の相続者であり、さなきだに富を恃んで傲慢なところへ、タナクィルを妻に迎えて、いっそう心を傲らせた。タナクィルは最上流の出で、自分の生まれついた身分より卑しいところへ嫁いだまま、それなりになってはいなかったのである。〔5〕エトルリア人たちがルクモを亡命の外来者の子として蔑むので、その屈辱に彼女は耐えられなかった。そして、母国に対する生来の愛着を忘れ、一途に夫の栄達を見んものと、タルクィニイ市から移住することを相談した。〔6〕このことにはローマが最適と見られている。あの新生の人民のもとなら、どんな貴人、権門も生まれたばかりで、それも功労に応じたものだろうから、雄雄しく強い男を容れる余地があろう。現に、タティウスはサビニ人の身で王となったし、ヌマはクレス市から招かれて王位についた。そして、アンクスは、サビニ女を母とし、ヌマの像ただ一つのおかげで高貴なのだ、と。〔7〕ルクモは名誉欲満満であり、しかも、タルクィニイ市は母の祖国でしかなかったから、説得は簡単であった。こうして、財産をまとめ、彼らはローマへ移住する。〔8〕たまたまヤニクルムの丘にやって来た。彼が妻を伴って二輪車に座っているところへ、一羽の鷲が翼をひろげてゆるゆると舞い降り、

帽子をとる。そして、けたたましく啼きながら二輪車の上空へ飛び立ち、あたかも神意によって使命を果たすべく遣されたかのごとく、今度は帽子をうまく頭にかぶせる。それから、天高く飛び去った。〔9〕この鳥の予兆（アウグリウム）をタナクィルは大喜びで受けとったと言われる。彼女は、エトルリア人一般の例に洩れず、天来の奇蹟によく通じた女性であった。夫を抱擁し、並はずれて立派なことを望め、と命じる。あの鳥が、天のあの方位から、しかも、あの神の使いとしてやって来た。人間のいちばん天辺に神示をもたらした。人の頭に戴いた飾りを取り去り、神意によって同じところに戻したのだ、と。〔10〕こうした望みと考えを抱きながら、彼らは町へ入った。そして、そこに居所を求めると、ルキウス・タルクィニウス・プリスクスという名を名のった。〔11〕ローマ人には物珍しく、また、富裕なところから、彼は目に立つ存在であった。彼の方でも慇懃に言葉をかけ、鄭重にもてなし、何かと尽力しては出来るだけ多くの人を自分に惹きつけて運命を伸展させようとし、ついに彼の噂は王宮に達するまでになった。〔12〕そして、その評判を彼は間もなく王のもとでの親密な友愛の絆へと転化させた。諸要件を引き受け、鷹揚に、かつ、抜かりなく処理したのである。そのため、私的な相談に等しく公的な相談にも与れば、軍事にも内政にも参画し、何事によらず極め付きの人物として、ついには遺言によって王の子供たちの後見人に指定されるに至った。」（リウィウスの訳については、鈴木一州訳註「ローマ市建設以来の歴史Ⅱ」、神戸大学教養部人文学会『論集』十四号（一九七四年）一〇一頁以下、一〇四頁を参照した。リーウィウス著／鈴木一州訳『ローマ建国史』上・岩波文庫・二〇〇七年、九一頁以下。一部訳文を変更、以下同様。）

（8） Ludwig Euing, Die Sage von Tanaquil, Frankfurter Studien zur Religion und Kultur der Antike, Bd.II, Frankfurt am Main, 1933 (Vittorio Klostermann Verlag) ; cf. Arnaldo Momigliano, Tre figure mitiche : Tanaquilla, Gaia Caecilia, Acca Larenza, in : Quatro contributo alla storia degli studi classici e del mondo antico, Roma 1969 (Editioni di storia e letteratura), pp. 455-488 [=Miscellanea della Facoltà di lettre e Filosofia dell'Università di Torino, Serie Ⅱ, 1938, pp. 3-28]. オイイングに肯定的な例として、Kerényi, Gnomon, 1934, pp. 134-9. ; Försch, Die politische Rolle der Frau in der römischen Republik, Stuttgart, 1935 (Wüzburger Studien zur Altertumswissenschaft, 5) S. 6. など。否定的、L. Deubner, Archiv f. Religionswissenschaft 33 (1936), S. 114 ; cf. F. Schachermeyr, REⅣA, s. v. Tanaquil.

（9） Mary Hays, Female Biography, or Memoirs of Illustrious and Celebrated Women of All Ages and Countries, 1803 (Richard Phillips) pp. 421-424. Pierre Bayle, Dictionnaire historique et critique, Tome Ⅳ (T.-X.), 1820, pp. 24-32, s. v. Tanaquil.（『ピエール・ベール著作集』法政大学出版局、野沢協・訳／解説、第5巻　歴史批評辞典3「歴史批評辞典」P～Z（1696年）抜粋翻訳を参照、ただし同項目は未収録）。ハルトゥング（Johann Adam Hartung, Die Religion der Römer, 1836, S. 314ff）、シュヴェーグラー（Albert Schwegler, Römische

Geschichte, Ferdinand Friedrich Baur, Octavius Clason 1867 SS. 668ff., 708ff)、プレラー（Ludwig Preller, Die Regionen der Stadt Rom : Nach den besten Handschriften berichtigt und mit einleitenden Abhandlungen und einem Commentare begleitet, Jena 1846, C. Hochhausen ; Römische Mythologie, 2. Aufl., Berlin 1865, Weidmannische Buchhandlung, SS. 527, 553, 585, 636）など。オイイングによれば、「貞節で勤勉な家妻の神話的原型」とするタナクィル観が当時の共通見解であった（Euing, op. cit. S. 13）。なお、パイスは別の解釈を提示する。Ettore Pais, Storia di Roma, I , 2, 1898 pp. 550 ; 573sqq. ; Ancient Legends of Roman History, translated by Mario Emilio Cosenza, (TRN) 2007, Kessinger Pub Co. p. 128sqq. ; 133. パイスによれば、タナクィルは、サビニ人のガイア・カエキリアと融合し、一方で、タルペイア崖のヴェスタたるタルペイアと同様に、クィリナリス丘のウェスタであり、他方、フォルトゥナとボナ・デアの形姿である。タナクィルとガイア・カエキリア、フォルトゥナとの関係について、あらためて検討することにしたい。

（10）Euing, op. cit. S. 16.

（11）Euing, op. cit. S. 17.

（12）ibid.

（13）Euing, op. cit. S. 18

（14）ibid.

（15）オイイングは、タナクィル像の起源を神性に求めようとする説を再評価しようとするものであったように思われる。例えば、G. De Sanctis, Storia dei Romani, I , 361は、タナクィルが、エトルリアの副次的な神であるとする［未見のため Momigliano, op. cit. p. 456 n. 5による］。cf. F. Schachermeyr, RE, s. v. Tanaquil も同様。オイイングは、Liv. 1, 34, 9 ; Dionysius Hal. 3, 47, 4 ; Serv. Aen. 2, 683 などから、タナクィルの神性についての証明を導いている。「しかしタナクィル以外に予言能力をもつエトルリア女性は証明されえなかった。……とすれば、タナクィルは、エトルリアの女性たちのなかに一人ではなくて、本来的に他の領域に帰属した存在、すべての人間の女性たちとは全く異なる唯一の形姿ということになろう。そして彼女の無類性は、バハオーフェンが考えるような男性に対する優位＝支配的地位にあるのではなく、その神としての性格に基づくものであろう。」この証明は必ずしも明確な根拠が示されているとは思われない。重要なのは、タナクィルがエトルリア世界で唯一の人物であろうとなかろうと、ローマ人にとって彼女がそのように見えたということである。

（16）Livius, 1, 39, 1-6「〔1〕その頃、王宮に、見るも不思議なら、成行きも訝しい変異（プロディキウム）があった。ある少年が眠っ

ていると——その名はセルウィウス・トゥリウスであったが——多くの人の見る前で、頭が燃えたと伝えられる。〔2〕そういうわけで、これほどの奇異な出来事に辺り中の人から叫びがあがり、これを聞きつけて王たちが出て来た。そして、奴隷の一人が鎮火のために水を持って来たが、女王に制止された。彼女は騒ぎをしずめ、ひとりで目ざめるまで少年を動かさないように命じた。やがて眠りの去ると共に焔も消えた、という。〔3〕その時、タナクィルは、そっと脇の方へ夫を誘って、「この少年を御覧ですか」という、「この子を、見るからに卑しい境遇から救ってやりませんか。この子は、いつか、きっと、私たちの覚束ない身の上に光となりますし、王宮の危機には護りになります。ですから、公共のため、私たちのために大きな誉れになる資質を、私たちにできる限り大切に育ててやりましょう。」〔4〕そのため、少年は王の子のように見なされ、大きな運命の開拓へと天賦の資質を鼓舞する技芸を以て訓育され始めた、という。事は容易であった。神神の意に適ったからである。彼は真に王者の才幹を備えた若者になった。そして、タルクィニウスの娘婿が求められた時、ローマの若者たちの中、何の技にかけても太刀打ちできる者はなく、王は自分の娘を彼と婚約させた。〔5〕これほどの大きな栄誉が、どんな理由からであれ、彼に与えられたということは、彼が奴隷女の子で、彼自身も幼い頃は奴隷であったと信じるのを許さない。私は、むしろ、次のことを伝える人びとに同意する。コルニクルム市陥落の折、その町の領袖（プリンケプス）だったセルウィウス・トゥリウスの妻が、夫は殺され、自身は身重の体で、ほかの捕虜たちの間に交っているのを見つけられたが、類なき貴顕の家柄のおかげでローマ女王に救われて奴隷に落ちるのを免れ、ローマのプリスクス・タルクィニウスの家で子を産んだ、というのである。〔6〕さらにまた、それほどの手厚い庇護を受けて、女同仕の親密さも増したし、男の子の方も、幼い頃から家で育てられたので、寵愛と栄誉を得た。母親の運命が、祖国を占領されて敵の手に落ちたというものなので、奴隷女の子と信じられる事態を生んだのだ、と。」（鈴木訳前掲、一〇九頁以下、前掲『ローマ建国史』一〇二頁以下を参照）

（16）この項は、Pierre Klossowski, Origines culturelles et mythiques d'un certain comportement, 1968.（ピエール・クロソフスキー／千葉文夫訳『古代ローマの女たち』平凡社・二〇〇六年、二九頁以下を参照した。

（17）Livius, 1, 41, 1-6「〔1〕瀕死のタルクィニウスは周りにいた人たちが支えた。一方、例の二人が逃げるのをリクトルたちが取りおさえる。そこからどよめきが揚がる。何事が起ったかと怪しみ、人民が馳せ集まる。大騒ぎの最中にタナクィルは王宮を閉ざすよう命じる。見ている者たちを追い出してしまう。傷の手当てに必要なものを、まだ〔回復の〕望みがあるかのようにさかんに用意する。同時に、もし希望が去っても、と考えて、別の守りを準備する。〔2〕至急、セルウィウスを呼び寄せ、殆んど生気のない夫を示すと、右手を執って訴える。義父の死に仇をとらずにはいるな、義父を敵どもの笑いものにしておくな、と。〔3〕「あなたのものです。

セルウィウス」と、彼女は言う。「あなたが男なら、王権はあなたのものです。他人の手を借りて卑劣きわまる罪を犯した人たちのものではありません。元気を出しなさい。そして、神神を導き手にして従いなさい。神神は、あなたのこの頭をその昔、神の火でかこみ、顕著な人物になろうと教えました。今こそ、あなたを、あの天の焔が起たせますように。今こそ、本当に目ざめなさい。私たちとて外人の身で統治しました。考えなさい、わが身の力を。出自ではありません。突然のことで考えがつかなければ、私の考えどおりにしなさい。」〔4〕群衆のどよめきと、ひしめきは殆んど抑えられそうにないので、タナクィルは王宮の上階から窓ごしにノウァ・ウィアへ向かって――というのは王はユピテル・スタトルの〔神殿の〕あたりに住んでいたからであるが――人民に話しかける。〔5〕気を鎮めよ、と彼女は命じる。不意の襲撃のため、王は人事不省だった。武器は身体に深くは食いこまなかった。すでに意識は返った。傷は、血を拭って、よく調べた。万事、格別のことはない。やがて、皆みな、王の姿を目にするだろうと信しる。しばらく人民はセルウィウス・トゥリウスの命を聴くように。彼が裁きを行ない、そのほか、王の務めを果たすであろう、と。〔6〕セルウィウスは式服をまとい、リクトルを先導せしめて進み出、王の座に腰を下ろして幾つかの事柄を裁き、他のことは王に相談しようと言って取り繕った。このようにして何日かの間、すでにタルクィニウスは息を引きとっていたのに、その死を隠し、身代りに役目を果たすように装って、実は自らの勢力を固めた。だが、王宮に慟哭が起こり、ついに事情は明らかになった。セルウィウスは屈強の護衛で身辺を固め、ローマで初めて人民の決議を経ずに、父たちの同意を取りつけただけで王位についた。」（鈴木訳前掲一一一頁、同前掲訳書一〇五頁以下を参照）。

（18）　Dionysius Hal., Rom. 4. 1ff. 大意を示すと、コルニクルムがローマに占領されたときに、その王家出身のトゥリウスが殺害され、妻のオクリシアは捕虜となってタルクィニウスの妻の奴隷とされ、トゥリウスの子を産んだ。その後オクリシアは解放されるが、子どもは母が奴隷身分の時に生まれたために、Servius つまり「奴隷の（子）」と呼ばれた。セルウィウスは幼い頃に頭が炎に包まれた。[この奇蹟のその後の経過はリウィウスと基本的に一致する]。別伝によれば、王宮の竈の火の上に陽根が出現し、タナクィルはオクリシアをその部屋に入れて神々の一人と交わらせ、その結果セルウィウスが生まれた。その後セルウィウスはローマ市民に認められ、戦場で数々の武勲を立てた。王はセルウィウスを養子として娘と結婚させ、公私さまざまな仕事をまかせた…。平田隆一・前掲Ⅲ、一頁以下はキケロ、リウィウス、ディオニュシオスを総合的に分析している。

（19）　Livius, 1, 42, 1.

（20）　Dionysius Hal., 4, 7, 4 ; 4, 30 (Fabius).

（21）Ovid. Fasti 6. 627-636「トゥリウス王の父はウルカヌス神、母は美貌の誉れ高いコルニクルム生まれのオクリシアでした。このオクリシアに、タナクィル女王は、一緒に祭儀をしきたりどおりに済ませたのち、飾りを施した竈に酒を注ぎかけるよう命じました。と、その灰のあいだに男性器の形のものがありました。現実か、幻か、どちらと聞かれれば現実だったのでしょう。虜囚の身の彼女は命ぜられたとおり竈の前に座っていました。こうして彼女が身ごもって生まれたセルウィウスは一族の種を天から授かることになりました。父は父親のしるしを示しました。閃く火でセルウィウスの頭に触れたのです。と、髪の毛の上に冠のような炎が燃え立ちました。」（高橋宏幸訳『祭暦』・国文社・一九九四年、二四六頁）。Pliny, NH., 36, 74「わたしは、ローマ文学で有名な炉についての事例をひとつ記述することを忘れてはならない。タルクイニウス・プリスクスの治世に起こったことだが、彼の炉の灰の中から突然男根が出現し、そこに座っていた囚われの娘で、王后タナクィルの侍婢であったオクレシアがそこから起き上がると、身重になっていたという。この物語によると、これが王位を継いだセルウィウス・トゥリウス誕生の次第であったという。その後、そして王の家においても、その子が眠っているとき、その頭の周りで焔が輝いた。だから彼は、家を守護する神々ラレスの息子であると進ぜられていたということである。そこで彼はラレスの神を崇めて、初めてコンピタリア祭を行ったのだという。」Plutarch, de fort. Rom. 10 ; Quaest. Rom. 100. Arnobius, Adv. gent. 5, 18.

（22）Bachofen, Bd. VI, S. 180ff.

（23）Cicero, de rep. 2, 34-38.「34　しかし、この頃はじめてわが国はいわゆる接ぎ木された学問によってさらに知識を深めたと思われる。それはギリシアからあの学問や学術がいわば細い小川ではなくきわめて水量豊かな大河となってこの都の中へ流入したからである。じじつ、伝えられるところによるとコリントスにデマラトスという人がいて、名誉においても声望においても優に彼の国の第一人者であった。しかし、彼はコリントスの僭主キュプセロスに我慢できなかったので、多くの財産を携えて亡命し、エトルリアでもっとも栄えた都市タルクィニイへ行ったと言われる。そしてキュプセロスの専制が確立したことを耳にしたとき、この勇敢な自由人は祖国を捨て、タルクィニイ人によって市民として受け入れられて、その国に住所と住居を置いた。そこで彼はタルクィニイ人の妻から二人の息子をもうけたとき、彼らをあらゆる学術について、ギリシア人の陶冶に従って教え……37　ラエリウス「いま、わが国の体制は一時代に限られるものもなく、一人の者の手になるものでもない、というあのカトーの言葉がいっそう確実となる。じじつ、いかに多くの優れた有益な制度が一人一人の王によって加えられたか明らかである。しかしこの次に来る者は、国家についてほかの誰よりも多くを理解したようにわたしには思われる。」「そのとおりです」とスキピオは言った。「さて、彼はそのあとセルウィウス・

トゥリウスがはじめて国民の命令によらずに統治したと伝えられる。噂によれば、彼は王の被保護者であった者の種を宿したタルクィニイ出身の奴隷を母親として生まれたということである。彼は奴僕に一人として育てられ、王の食卓に仕えたとき、当時すでに少年から輝き出た才能のひらめきは気づかれずには済まなかった。そのように彼はすべての仕事や話において巧みであった。それゆえ当時ごく幼少の子供しかなかったタルクィニウスは、人々に彼の息子と思われたほどセルウィウスを愛し、さらに彼自身が学んだすべての学術について、ギリシア人のきわめて入念な流儀に従い、この上ない熱心さで彼を教育した。38　しかし、タルクィニウスがアンクスの息子たちの奸計によって殺され、セルウィウスが上に述べたように市民の命令によってではなく、彼らの好意と同意によって支配を始めたのち――そのわけは、タルクィニウスは傷のために病気であってなお生きていると誤って伝えられたので、セルウィウスは王の飾りをつけて判決を下し、債務者を自分の負担において解放し、多くの親切を行うことにより、彼がタルクィニウスの命令によって判決を行ったいるのだと人々に思い込ませたからである――、彼は自分について、元老院議員に一任する代わりに、タルクィニウスの埋葬後みずから国民の意見を問うた。そこで支配せよ、との命令を得てから、自己の命令権について、クリア民会で承認されるべき法律を提出した。そして、彼はまずエトルリア人の不正にたいし戦争によって復讐し、この戦いから…。」（岡道男訳『国家について』『キケロ選集8』岩波書店・一九九九年所収を参照、一部字句を変更。）

(24)　CIL, 13, 1668=Dessau ILS, 212.「…かつてこの都市は王が支配していた。しかしいずれの王も、自分と同じ血統の後継者にこの市を譲ったことはない。…アンクス・マルキウス王の跡を継いだのは、プリスクス・タルクィニウス王である。彼の父は、コリントスの人デマラトスで、母はタルクィニイの貴族の生まれだ。彼女はこのような夫に従うのもやむを得ないと考えたほど貧乏だった。こうして血を汚されたため、タルクィニウスは、故国で官職に就くことを拒否され、ローマに移住する。その後で、ローマの王位を獲得したものである。／タルクィニウスと、その息子か、それとも孫か（というのも、この点で歴史家の意見が分れている）との間にも、セルウィウス・トゥリウス王がはさまっている。もしローマの伝承に従うなら、トゥリウスはオクリシアという捕虜の女の子だ。エトルリアの伝承によれば、彼は、かつて、カエリウス・ウィウェンナのもっとも忠実な同志として、あらゆる難儀をともに分けた人だ。さまざまな運命に翻弄されたすえ、カエリウスの手勢の残りを全部つれて、エトルリアからおちのびてきて、カエリウス丘を占住する。この丘の名は、彼らの将軍カエリウスにちなんだものである。トゥリウスも名前を変え、（エトルリアにいた時はマスタルナと呼ばれていた）、今呼ばれているような名前を名のった。そして国家に偉大な貢献をなしたため、王位をえたのである。」（國原吉之助訳『クラウディウスの演説』、同訳『タキトゥス年代記』下、岩波文庫・一九八一年、五一頁以下所収、五二頁及び註8を参

照）。いわゆる「リヨンの銅板」について、野上素一・金倉英一『沈黙の世界史4　エトルリア・ローマ・ポンペイ』新潮社・一九七〇年、八一頁以下を参照。マスタルナとセルウィウス・トゥリウスとの関係について、Schwegler, op. cit. (n. 9), S. 717ff. ; Kleine Pauly Ⅲ, 1070f. ; Schachermeyr, RE Ⅳ A, 2368 (Tarquinius 5) ; Radke, RE Ⅷ A, 2454ff. (Vibenna) を参照。

(25) Plutarch, Quaest. Rom. 36, p. 273c ; 30, p. 271e ; de mul. virtt. p. 243c ; fort. Rom. c. 10. p. 323d. Zonaras, Ann. 7, 8f. 鳥の予兆のシーンにタナクィルは登場しないが、セルウィウス王即位の際の活躍について、ウァレリウス・マクシムス Valerius Maximus, de viris illustr. 1, 6, 1. も参照。フェストゥス Festus, p. 95 Müllerでは、プリスクスとの結婚について、クラウディアヌス Claudian, Laus Serenae reginae v. 16では予言能力について、ディオニュシオスに引用のファビウス・ピクトル（Dion. 4, 30）では、タナクィルによる息子アルンスの埋葬について、それぞれ言及がある。

(26) シュテファン・シュタイングレーバー編『死後の礼節　古代地中海圏の葬祭文化：紀元前7世紀―紀元前3世紀』東京大学総合研究博物館／東京大学出版会（発売）。二〇〇〇年のフランソワの墓の紹介を参照。Bachofen, Bd. Ⅵ, S. 58 n. 8所掲の文献。平田・前掲論文Ⅲ、三頁以下、フランソワの墓の図絵の分析はきわめて示唆的である。一四頁註4所掲の文献を参照。野上・金倉前掲『沈黙の世界史4』八二頁以下本文及び挿図、M・パロッティーノ著・岡村崔・青柳正規訳『エトルリアの壁画』岩波書店・一九八五年、第一八図及び三八三頁解説を参照。

(27) Noël Des Vergers, L'Etrurie et les Etrusques, Paris 1862sqq. 3, p. 18, 25 [未見。Bd. Ⅵ, S. 58n. 8 ; S. 59. による。]

(28) ただし、バハオーフェンによれば、「タナクィルの図像は作業者の不注意で壊れてしまったが、文字で記されたタナクィルの名前（thanchvil）は発見者ヴェルジェーの権威によって確実なものとみなされる」、Bd. Ⅵ, S. 59, n. 3. 編者註によれば「この Thachvil は Mastarna のシーンと関係がなく、墓主の妻のこと」とある。

(29) Liv. 1, 47, 6.「あのタナクィルは外来の女性の身で大いに知略を発揮し、夫を、続いて婿を、相次ぐ二代の王位につけ負わせた。」

(30) Liv. 1, 47, 6.

(31) 泉井久之助訳『アエネーイス』下　岩波文庫・一九七六年、訳者解説、四二三頁以下を参照。

(32) Lucumo の語源について、Kleine Pauly Ⅲ, 779 ; Serv. Aen. 2, 278 ; 8, 475.

(33) 『タナクィルの伝承』の補論として、エトルリア人家族の母性原理について、エトルリアの墓碑銘の分析を通じての詳細な言及がある、Bachofen, Bd. Ⅵ, S. 315ff. を参照。